細胞共振型集落-開発のひずみをネクストコミュニティへ再生

５０年後には人口減少、少子高齢化、単身者増加、多国籍化などが起こることで、家族のあり方は変わり、コミュニティの維持は困難になる。従来の住宅、学校や介護施設のように血縁のある家族や特定の年代だけが集まる場所をつくるのではなく、大きな庭道で保育や教育、介護をはじめとする生活を共同で行う集落のあり方を考える。学校や介護施設などある目的に特化してきた建築は機能が未分化の状態に近づき、もう一つの家のような拠点に世帯と世代をこえた「家族」で暮らすようになる。

右肩上がりのパラダイムとは異なる次世代の集落の理想郷をつくりたいと願い、
都市開発の荒波にもまれてコミュニティが崩壊しかけている「新宿区富久町」を再生実験の場に選んだ。

新宿区富久町は新宿駅徒歩圏にある低層の住宅街である。バブル期の激しい地上げなどで空き地や空き家が点在しており、狭い道路が錯綜している。トドメに都市計画道路（環状４号線）縦断の用地買収で東西に分断されている。経済性と合理性を最優先した戦後の都市開発が住人に寄与せず、ひずみとなって表出し、ほころびが堆積している。

仮開放の公園

用地取得済みの街区

再開発エリア

敷地内に庭を持てないため、道を庭として使う

裏手も塀は建てず路地とする

道に植栽がはみ出る

2070年、72歳の私が暮らす街を訪ねてみた。
そこでは「生命（いのち）の営み」を核とした家族と都市の修復のストーリーが育まれていた。

従来の開発や建築の概念ではマイナスの材料を取り除くことに注力したが、むしろプラスの資源と捉え、それを生かして集落を修復していく。とりわけ戦後「クルマ中心社会の到来」を見据えた道路計画は交通量の減少により見直しの必要に迫られる事態も予想される。そこで、環状４号線をクルマが入れないオープンスペースに転用し、人が集う「機軸」と位置づける。開放的な道は大勢の人々を迎え入れ、包み込み、親密で雑多なコミュニケーションが生まれる可能性を秘めている。

住民が必要のない車道を判断し、歩行者のための道にしている

道路の半分にまで植木鉢を置いてしまう

いきなり道が細くなる

歩行者専用道路にする

車道を封鎖している

車道の真ん中に建築する

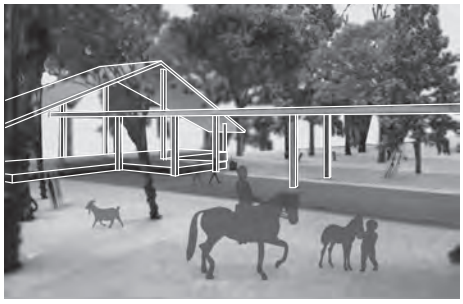
細胞共振型集落

共有と共用を重んじ、かつての集落が持っていた温もりのある「界隈」という情緒を取り戻す。痛んだ細胞も刺激次第で互いに影響を及ぼしながら癒えてつながっていくという「仮説」を、やがて土に帰っていく素材を用いた「仮設（建物）」により検証しようと考えるに至った。具体的には、空き地、空き家（廃屋）、都市計画道路用地、細道、路地など、ほころぶ細胞膜のところどころに「核」を与えることで細胞群を共振させて連接し、コミュニティの回復・拡充を果たす。

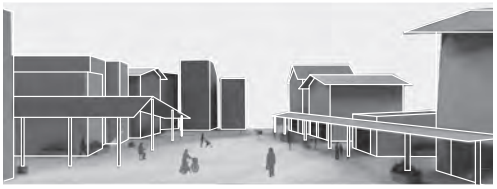
そして、庭道が細胞膜となり、住人同士のつながりを促す理想郷をつくる。すなわち、「都市―車道―街区―地割―建築」というヒエラルキーが解体して「集落（細胞群）―庭道（細胞膜）―建築（細胞の核）」という生物構造が形成される。「空（くう）」が結ばれることで人々が行き交う「道」、活動が芽吹く「庭」によみがえる。

道路は土に還る

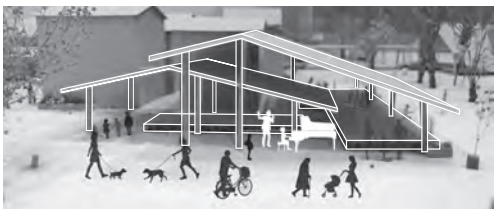
畑を耕す



動物と戯れる



マーケットに行く



偶然出会う

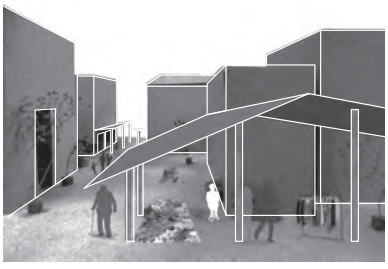
庭で遊ぶ

食物を育てる

自然の中で育つ

ものをつくる

植物を愛でる

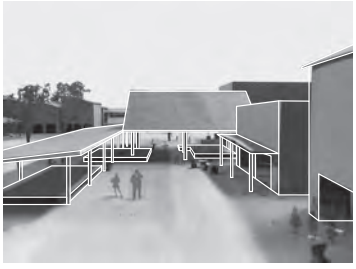


物々交換をする

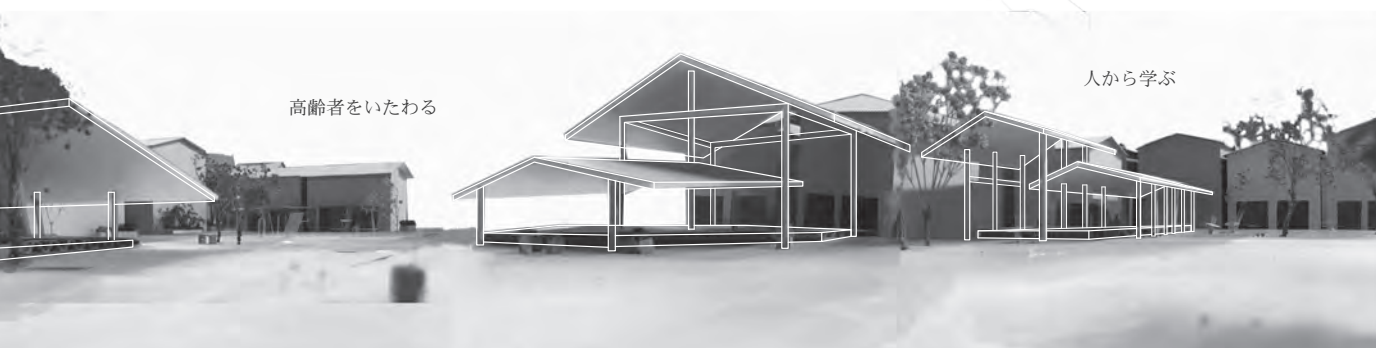
授業に参加する

銭湯に行く

料理をする



食事をする

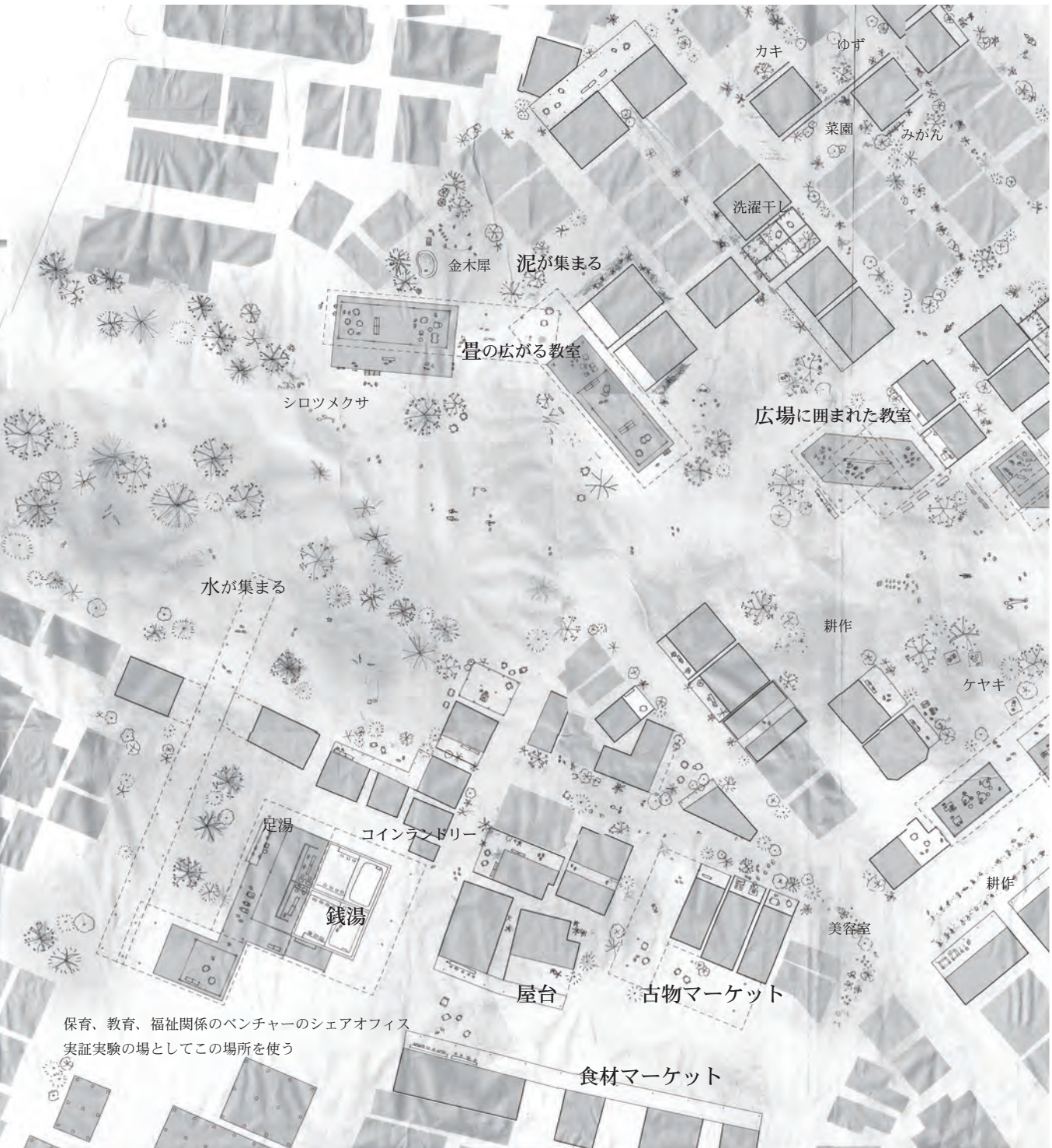


高齢者をいたわる

人から学ぶ

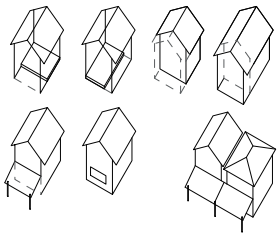
新設建物　「生命の学び舎」

生から死まで、一生は学びの連続でもある。しかし、家族・近隣関係が希薄化し、人生を充実させるためのリアルな知恵の継承や習得が妨げられ、ひいては社会全体に暗い影を落としている。そこで、立ち退きが終わった中央部の計画道路を逆手に取り、それに面した街角に人生のアクティビティ（生命の営み）に即した「学び舎」を設ける。世代・世帯・国籍などの垣根を超えて集い、生命の営みが交差・共鳴・融和する。なかでも幼稚園・小学校・中学校などの階層や学区に縛らず、子どもはおとなの背中も見ながら成長を遂げていく。要所への配置により、この学び舎は諸活動の起点となって周囲へ伝搬・波及していく。



既設建物　「束の間の長屋」

江戸時代の「長屋」の人間関係のように血縁に狭めず、家族の枠組みをやわらかく押し広げる。そのための手法として、空き家も含めた既存住宅の庭道側の立面に、土間を設ける、道を中に通す、外壁を二重被膜にする、軒を出す、開口を広く取る、などの簡素な改修を施して、ゆるやかな連結空間をつくる。世代・世帯・国籍などの垣根を超えて集い、気ままな時間や日々が交差・共鳴・融和する。長屋に特有の慈しみが生まれるとともに利便性も得られる。



インスパイアされた先達の映画作品など

「生きる」 黒澤明監督　東宝　1952 年

「生きる」は映画監督・黒澤明の作品である。
無為な日々を送る市役所の市民課長ががんで余命いくばくもないことを知る。
人生の最後の情熱を住民から要望されていた市民公園の整備に注ぐ。

黒澤明（くろさわ・あきら）
1910 年、東京生まれ。映画監督。
ヒューマニズムを基調とし、ダイナミックで完成度の高い作品で戦後映画の中心的な存在となり、国際的な評価を受ける。
代表作に「羅生門」「生きる」「七人の侍」「用心棒」「影武者」など。

「長屋紳士録」 小津安二郎監督　松竹　1947 年

「長屋紳士録」は映画監督・小津安二郎の作品である。
戦後間もない東京下町を舞台にしており、長屋でのつきあい、人情の機微が伝わってくる。
貧しい暮らしのなかにも幸せがにじみ出る。

小津安二郎（おづ・やすじろう）
1903 年、東京生まれ。映画監督。
庶民の生活、家族や結婚などを独特の文法で描写し、無声映画からカラー映画まで世に送り出して世界的な評価を受ける。
代表作に「生れてはみたけれど」「晩春」「麦秋」「東京物語」など。

「貧幸」

「私の青空」

「貧幸（ひんこう）」は脚本家・倉本聰の造語である。
確かに貧しさのなかにも幸せはある。
戦後、物質的に恵まれていくにつれて欲望が膨らみ、満たされない何かが心に巣食いはじめた。
富めることがかならずしも幸せとは限らない。
価値観そのものを見直さなければならない時期に差しかかっている。

倉本聰（くらもと・そう）
1935 年、東京生まれ。脚本家。
「貧幸」という言葉をつくった。「幸せとは、どのような状況にあろうと、いまが満ち足りていると感じられること」。

「私の青空」は喜劇王・エノケンの歌唱である。
この曲自体は「狭いながらも楽しい我が家」という家路での心の高揚を歌ったものである。
が、家族のあり方が変わる今後も、そうした幸せを感じられる居場所が私たちには欠かせない。

榎本健一（えのもと・けんいち）
1904 年、東京生まれ。喜劇俳優。
「日本の喜劇王」とも呼ばれ、第二次世界大戦前後に活躍した。
「エノケン」の愛称で広く知られる。

どのような時代であろうと、私たちは生きる。

私は50年後へのタイムスリップで、人類の叡智と日本人のたくましさを垣間見た。
「新宿区幸久町」の住所札の向こう、路地に面した公園で静かな笑みをたたえてブランコをこぐ自分の姿があった。
黒澤明監督・志村喬主演「生きる」の終盤のシーンが脳裏に浮かんだ。

お世話になったみんなへ

美紀ちゃん、あなたのおかげで終えることができました。感謝してもしきれません。
といばなくん、無理いって手伝いに来てもらってありがとう。
あかしくん、いろいろ教えられなくてごめんなさい。ぼくの力不足です。
はま、3年後期からピンチのときいつも駆けつけてくれてありがとう。
かいくん、細かくて大変な作業も率先してやってくれてありがとう。
みっきー&あやねー、直前に手伝いに来てくれてありがとう。2人からは元気をいっぱいもらいました。
ながさきさん&みやぽんさん、さすが先輩という感じです。指示が不十分でもが察して作業を進めてくれるし、
忙しい中ありがとうございました。2人の卒制手伝えてよかったです。